

今日の説教のポイント <マタイによる福音書 26 章 14-30 節>

キリスト教信仰の中でも特に大切な儀式である聖餐式。その大切さは、この基になる出来事に込められた意味を知る時によりはつきりと理解される。

- ①「イエスは言われた、『都のあの人の所に行つてこう言いなさい。先生が、“わたしの時が近づいた。お宅で弟子たちと一緒に過越の食事をする”と仰っています。』(18)

最後の晩餐の意味は、どうしても、過越の食事の意味を知らなくては深く理解することができません。過越の食事、それは、神の選びの民イスラエルの人々にとっては、かつて父祖たちがエジプトの奴隷状態の苦しみからヤーウェの神によって救い出されたことを想起する食事でした。「驚くべき神様の出来事」、否、もっと正確に表現する必要があります、「驚くべき、恵みの神様の救いの出来事」であったのです。その出来事を想起すべきときの中で、「さらに驚くべき、恵みの神様の救いの出来事」が起こされたのです。その神様の御子イエス・キリストによって！ それはどのような意味で「さらに驚くべき」なのでしょう？

- ②「一同が食事をしているとき、イエスは言われた、『はつきり言っておくが、あなたがたのうちの一人が私を裏切ろうとしている。』弟子たちは非常に心を痛めて、『主よ、まさかわたしのことでは』と代わる代わる言い始めた。」(21-22)

二つ重要な点があります。一つは、「裏切ろうとしている」と「裏切る」という表現が 21, 23, 24, 25 と立て続けに出て来ますが、この基のギリシア語は、ユダが祭司長たちにイエス様を「引き渡す」(15)、そして、キリストが「私たちのためにご自身を引き渡された(身を捧げられた)」(ガラテヤ 2: 20) と、「引き渡す」とも訳されている語だということです。二つ目は、ユダだけでなく、他の弟子たちも、『主よ、まさかわたしのことでは』と代わる代わる言い始めた点です。つまり、ユダだけでなく、他のどの弟子たちも、自分がイエス様を裏切るかもしれない、と思っていたということです。それはつまり、私たちは、ユダだけを裏切り者と見てはならない、ユダは私たちの代表であるのだと考えなければならないということなのです。

この二つを重ね合わせると、大変なことが見えて来ます。つまり、ユダの裏切りの最奥に、神様がイエス様を引き渡されたのであり、それも私たちの罪を赦すためであった、という驚くべき恵みの御業が見えて来るのです！ かつて、エジプトの奴隷の苦しみからご自身の民を救い出して驚くべき業を示して下さった神様が、今、それを越える驚くべき恵みの業、滅ぼされても当然の私たち人間の罪をご自身の御子を犠牲にすることによって、それを信じる者を新たな救いに招き入れようとして下さったのです！！ 私たちの教会は、十二弟子やパウロと共に、この驚くべき神様の恵みを、最後の晩餐となったこの食事の中でイエス様がなされた 26 節以下の行為を礼拝の中で行うことで覚え直すのです。他のどこにも見ることでできない、この神様の恵みをです。神様の招きにお応えして(洗礼を受けて)、畏れをもって、また喜び、感謝して、聖餐に与ろうではありませんか！